

で発生すると激しい腹痛、嘔吐、血便等の症状が現れます。冷汗が流れ、さらに重症になるとショック状態になります。このような症状が始まれば、急いで救急車で設備の整った病院に搬送してもらいましょう。

そして、病院で診断が確定すれば病状に応じて輸液、抗生物質、血栓溶解剤等の点滴など適切な処置をおこないます。しかし、その余裕がない重症な場合は、直ちに消化器外科専門医により緊急開腹手術を行い、動脈血栓で壊死をおこした腸を切除することになります。

約六年前には日本の現役の総理が脳梗塞で倒れられ、また約二年前在任中の総理が心筋梗塞で倒られました。

そして、両総理とも帰らぬ人となりました。さらに、時代を遡ると、約三六年前有名な喜劇王が閉塞性動脈硬化症で下肢の切断を受けられました。

これらの大切な方々の生命を奪った病気は脳卒中、心筋梗塞、閉塞性動脈硬化症です。そして、今年には日本では

稀な腸管膜血栓症のため元総理が大手術を受けられました。

これらの重大な疾患の原因はいづれも動脈硬化です。したがって、動脈硬化の予防が極めて重要です。このような動脈硬化をきたしやすい病気は生活習慣病で肥満、糖尿病、高血圧、そして最近マスコミで話題になっているメタボリックシンドロームがあります。

肥満、糖尿病、高血圧が動脈硬化を促進する危険因子であることはよく知られています。しかし、新しく加わった危険因子のメタボリックシンドロームはやや肥満傾向で血糖値、血中脂質、血圧が少し高い方にみられます。これらの軽度な異常が重なると動脈硬化が進行しやすいことがわかってきました。

そこで、日本の内科学会、糖尿病学会、動脈硬化学会、循環器学会等関係学会が集まって疫学的研究データを参考にしてメタボリックシンドロームの診断基準が作られ発表されました。その診断基準では腹囲が、男性で八五cm、女性で九〇cm以上であること。

そして、①中性脂肪一五〇mg/dl以上、②善玉コレステロール四〇mg/dl以下、③上の血圧が一三〇mmHg以上、④下の血圧が八五mmHg以上、⑤血糖値一一〇mg/dl以上のうち、①から⑤までの項目が二項目以上あればメタボリックシンドロームと診断されることになりました。

では、生活習慣病の対策について考えてみましょう。まず、体重をコントロールし、身体に合った軽い運動と食べ過ぎを避け、適切な基準エネルギーを摂取することです。また、最近多いストレスを上手に発散しましょう。

このように、時の人を襲った脳血栓、心筋梗塞、閉塞性動脈硬化症、そして新顔の腸管膜血栓症のいづれも動脈硬化が主病因です。

では、これからは動脈硬化を招く生活習慣病（肥満、糖尿病、高血圧、メタボリックシンドローム等）を予防し、お腹の卒中をはじめ脳血栓、心筋梗塞、閉塞性動脈硬化症を防ぎたいものです。

オギザリス

中西美子



随分前のことですが秋の晴れた日いつもと違う道を歩いていたら、目にも鮮やかな紅色の花を見つけました。後日似たものを花屋の店先で見つけ買い求めました。次の年には、びっくりするほどふえて。花が終わると球根がごろごろ、いまでは、抜き取るほどです。これは、カタバミの仲間で、花も大きく丈夫な品種ポーウイというもののようなです。葉もクローバーのようでかわいいので、お気に入りのお品です。でも、晴れないと花は開きません。

木曾義仲と巴の来迎寺伝説



志村有弘
(相模女子大学教授)

六月、新潟県の長岡に出張した。ゼミの学生が教員免許取得のために教育実習に行っているので、その巡視のためである。巡視といいかめしいが、学生がお邪魔をしている実習校へのご挨拶である。

長岡市来迎寺の越路中学校。その中学校の所在地は、長岡駅から信越線で三つ目の来迎寺駅。「らいこう」と濁らずに「らいこう」と読む。その中学校は、二年前の地震で校舎が倒壊し、今、建設中で生徒たちは仮設校舎で授業を受けていた。

学生から実習校の住所などを書いた書類を渡されたときから、「来迎寺」と

いう地名を見て、心の中で密かに期待するものがあつた。実習校へのご挨拶が第一の目的であるのは当然だが、それが終わって少しでも時間があれば、来迎寺なる寺を訪ねてみたい。地名になるくらいなのだから、由緒のある古い寺が存在しているのではないか。もしもその寺の由来書を書いた「略縁起」でもあつて、そのようなものを見ることでできたならば勉強になる。私の心の中にはそうした期待感が強く起こっていた。事前に地名辞書等で調べてみたが、なにひとつ明確なことは分からなかった。

上野から六時十四分の新幹線に乗り、

長岡駅で信越線に乗り換えて来迎寺に到着した。学生が書いてくれた地図を見ながら、中学校へ行く坂道を登ると、そこは巴ヶ丘である。

巴ヶ丘には中学校の並びにもみじ園という名庭園がある。越路中学校の山谷真校長先生が、

「ここは木曾義仲の妻であつた巴御前に因んで巴ヶ丘といわれ、丘の下に朝日神社があり、麓の集落名を朝日町といひます」

と教えてくれた。越路中学校の校歌の中にも「吹け さみどりの風映えて 若きいのちは澁刺と 巴ヶ丘に 薫り たつ……」と、巴ヶ丘という地名が入っている。(校歌は、実習生加藤里子さんのご教示による)

そうであるとする、朝日町とは朝日將軍木曾義仲に因むものであり、朝日神社という社名もあるいは義仲ゆかりのものであろうか。

巡視の帰り道、中学校から近くの朝日神社に寄ってみた。宮司さんは、「この町と巴や義仲と結びつける文獻

資料がないため、そうだと断定することはできない。義仲顕彰会の人たちもここを訪ねてきて、同じことを聞いておりました」

と話していたが、仮に事実ではないにしても、このような伝説が存在することを知っただけでも収穫である。『角川日本地名大辞典』の「朝日町」の説明に「地名の由来は、朝日將軍木曾義仲の伝説によるという」と記されている。巴は義仲が粟津で戦死したあと、一時期この地に住んだものであろうか。

そういえば、滋賀県大津市の義仲寺の無名庵は、巴が義仲の墓所近くに庵を構えて供養していたという伝説がある。尼をいぶかった里人が何者であるかと問うと、「名も無き女」と答えたことから無名庵という名がついたのだという。

私は、『平家物語』ゆかりの人物たちの史跡を尋ね歩いたことがある。義仲の史跡を訪ねて木曾を歩き、墓所の義仲寺や義仲の乳母子の今井四郎兼平の墓には何度も訪れている。

滋賀県の大津駅の横にやはり義仲の愛妾であった山吹ゆかりの地蔵があり、これは里人がこの近くで最期を遂げた山吹を哀れんで建てたものというが、京都市東山区の有済小学校校庭にも山吹塚があり、土地の伝承では山吹はここで亡くなったのだという。ところが、埼玉県の嵐山町班溪寺にも山吹の墓があり、山吹ゆかりの塚は相当数存在することになる。どれが本当であるのかさだかでないが、これが伝説の面白さである。

ところで、来迎寺であるが、駅名が来迎寺、町中にも来迎寺という集落名があるのに、結局、来迎寺という寺も、その寺跡も見つけることはできなかった。別のことだが、『角川地名大辞典』の「来迎寺」の項には真宗大谷派の安浄寺が高田藩主松平光長の位牌寺として徳川家の葵紋の使用が許される由の説明がある。

現在のところ、私には長岡市の（来迎寺）という寺の詳細は分かっているのである。

ところで、長岡が生んだ歴史上の人物といえは、長岡藩軍事総督の河井継之助と連合艦隊司令長官山本五十六がいる。

河井は、新政府軍と会津藩との和陸を計ろうとしたが、失敗し、激戦の末に銃弾を受けて会津の只見村で死去した。

山本五十六の父は長岡藩士高野貞吉で、養父の山本帯刀は戊辰戦争のおり長岡藩大隊長であった。五十六はもともと戦争反対者であったのだが、皮肉なことに太平洋戦争時の連合艦隊司令長官の任務に就くことになった。

戦いを避けようとして努力した河井継之助は結局は戦わざるを得なくなつて戦死し、山本も周知の如く、昭和十八年四月、飛行機上で戦死した。

来迎寺に伝えられる木曾義仲と巴伝説、長岡の武人河井継之助と山本五十六。彼等は歴史に名を残したものの、その生涯は一樣に悲劇的であったといえる。

「単なる言葉で……」



志し村むら榮よし守もり
(評論家)

このシーズンになると、あのアメリカ南部を襲った巨大ハリケーンの猛威が頭をよぎる。いわゆる超下級とは、こんな時の言葉かも知れないと思ったものだ。

そう言えば、あの時、自然の苛烈さとはやや趣きを異にするシーンを目撃した。ハリケーン通過後のレポを見ていた時のことだ。

高齢のご夫婦（白人）のワゴン車が自宅のそばで泥水の深みにはまっていたところに、報道のカメラマンが同乗したレスキューのボートがたまたま通

りがかった。もちろん隊員は職業人の手際の良さを發揮して、紐をかけて引き上げた。

この時、ご夫妻は離れて行くレスキューのボートへ向けて手をあげて言った、「サンクス！」。これに対してレスキューが返した言葉、これが実にいい感じだった。「ジョブ！」（仕事です！）。

このごくありふれた光景が、その時は妙に新鮮に映じ、いわば感動した。もしこのシーンをそのまま身近なところへ持つてくれば、長い間の習性から「どういたしまして！お気をつけて！」

のはずが、そうではなかったからだろうか……。

謙譲の美德——という言葉もあるように、相手を思いやる言葉遣いで、私達は円滑な人間関係、つまり社会を動かして来た伝統を持つと思われる。しかし、何と言っても、この時の最初の言葉は、相手から発せられた内容を否定している。（「どういたしまして！」）。

私達は聞き慣れているので気にも止めないが、案外、人間存在の根底のところと係わり、彼我の人間形成に差異として影響しているかも知れないのだ。外国映画でこんなのを見た時にも、まったく同じことを思った。

街路に車を止め、彼氏と運転手が、彼女の長い化粧にしびれをきらしつつ待っている。足元には吸いガラが散乱している。そこへバッチリ決めた美女が登場して言う「待たせたかしら？」。すると彼氏はこう応じた、「マイ・ライフ！」。

いや、実にイキで、これまたいい感じだった。ここでも日本の彼氏を想定

してみると。「いや、ぜんぜん……今、来たところだ」と相手の言葉をますず否定することが考えられる。

話は少し転じるが、メジャーの名門球団の日本人スラッガーが大アクシデントに遭遇した。まさかのことで、ニュースがその瞬間の映像を繰り返し流していた。

と、この時も、あることが頭に浮かんだ。その少し前の週刊誌の広告で目撃した文字が、いやがうえにも巨大化して目前に迫って来る気がした。それは、スラッガーが親しい人に冗談めいて喋ったとされるセリフのことだ。(コトの真偽はわからないが)。そこにはこうあった、「オレは裏切者」。

もちろん開幕前の世界大会への辞退を、自嘲気味に(大半は冗談か)そう言ったわけだ。もしあのアクシデントが起ころなかつたなら、誰もが口にする冗談の一つとして興味を持たれることなく聞き流されていた、と思われる。しかし、現実のこの場面には、明らかに自嘲という自己卑下、つまり瞬間的

とは言え自己否定……等々が見える。いわゆる否定の言葉があれこれ考えられるところにいる。

実直という言葉を連想させる彼は、自らがあの時チョイスした道がはたして最善だったのかどうか、悩んだと推察される。好漢の早期快癒を希いつつ、勝手な想像が駆け抜ける。

ところで、小林秀雄『「真実一路」を廻って』には、こういうところが出て来る。(「真実一路」は山本有三の小説。)「自分は所詮こんな性格の人間だといふ言葉が、どんなに人間を不幸にしているだろう。単なる言葉で不幸になつてゐる」。

それにしても私達は、幼少期より家庭、学校という自らを訓育する場と機会に恵まれながら、言葉の本質とか真相というものに肉迫する努力を怠つて、大人になってしまったことだろう。いや、自らの場合を省てそう思うだけなのだが。そしてある日、身に降りかかって来たことが、何と係わりを持つか考え始め、ついにはここへ至る。

また、小林は『本居宣長補記』のイントロで、あのソクラテスに触れこう書く。

「言葉は、(中略)己れの魂に植えつけられて生きてゐるものだ。プラトンの対話篇を通じて扱はれてゐる真の主題は、正しく思索する力といふもの、正しく語る力以外のものではないと極言して差支へない」。

また、この著のクライマックスに至つて、自らがあたかも本居宣長に化身したかのように、言葉への思いをこう書いている。

「彼(＝宣長)は、思想があつて、それを現す為の言葉を用意した人ではない。言葉が一切の思想を創り出してゐるといふ事を、見極めようとする努力が、そのまま彼の思想だったのである」。

英語圏の人々の軽い応答にふと、言葉の秘める謎の一端を垣間見た気がしたが……。

※周知のようにソクラテス自身は書物を残さなかつた。

家出ノススメ



桐原 良光

(文芸評論家)

奈良県田原本町の医師宅で、十六歳の長男が自宅に放火して母親と弟妹を焼死させた事件には、異常な事件統発の時代とはいえ、シヨックを受けた。少年の通っていた高校が地元の名門私立校だったからかということではない。

「ガリ勉校」からは、時折、異常な少年が出現することはこれまでもあった。しかし今回の少年は、サッカーが大好きで、父親にサッカー部を辞めさせられた後も、剣道部にいたという報道があった。文武両道に励むということとは、精神的にもバランスの取れた育

ち方をしているのではないかと思いついていた単純な僕は、自身の迂闊さをまたまた思い知らされた。

少年の調べが進むにつれて、少年が「逃げ場がなくなつた」と思い込む様々な背景が浮かび上がってきた。中でも、大きな要因となつたのが、父親の存在だ。少年は「父親にしばしば殴られた」と言っているようだが、それだけならそれほど珍しいケースではないかもしれない。「家そのものを父のように感じてしまつて、そこから逃げたかつた」と供述しているのには、この時代に、

と正直表を突かれた。だから、その存在を消すために火を放ってしまったというのだ。それほど少年にとつて、父親の存在は大きかった。少年は、事件を起こした時、父親と一緒に写した写真を持って出ていたというから、父親への恨みだけが原因となつたものではなさそうだ。少年の心の中に、父親への深く複雑な思いが交錯していたのだろう。

父親は、少年を自分と同じような、あるいは自分以上の医師にしたかつたようだ。そのためには、少年の成績をなんとしても上げてやりたい、と考えたのであろう。医師宅では、書齋を「ICU」と呼んでいたという。病院の「集中治療室」で、文字通り救命のための集中的な管理が行われる場だ。このICUで、少年の学力アップの「治療」が行われ、しばしば怒声が近所にまで響き渡り、またしばしば「スパルタ教育」が施されていたようだ。

少年は、中間試験の結果がそれほど良くなかつたにも拘らず、父親に「ま

あまあだつた」と言ったことが、事件当日の保護者会でバレルことを恐れて火を付けたと供述している。嘘を付いたことで、また父親から殴られると、ただただそれだけを思い悩んでしまったのだろうか。

少年は、事件から二週間ほど経って、弁護士に「家出だけにしておけばよかった」と話したそうだが、この報道に接した時の僕の反応は、「遅い!」という叫びにも似た言葉だった。古今東西、家の中の問題に悩んだ少年や少女たちは、まず家を出て、それから改めて様々な考えを巡らせたのではなかったろうか。僕の読んだ文学作品の数など知れたものだが、青春小説と呼ばれた作品の多くがそうだったような気がする。

青春小説の名作とも言われるJ・D・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』は、野崎孝訳がよく知られていたが、二〇〇三年になって、村上春樹訳の『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（白水社刊）が出て、日本でも若い読者層に再び火が付いた。ご存知のよう

にこの小説の主人公はホールデン・コールフィールド君。彼が「四つ目くらい」（引用は村上訳）の学校を退学処分になった十六歳当時のことを、その翌年に語り続けるのだが、少年なら誰もが親や教師、友人に抱くであろう複雑な思いが込められていて、とても他人事とは思えない。彼は自ら退学処分になるような答案を提出し、ルームメイトと殴り合いの喧嘩をしてボコボコにされた後、学寮を出て、自宅へも帰らずにニューヨークを放浪する。

ホールデン君の両親も「いい人たち」で、父親は特に感じやすい人であることが説明されている。少年の両親も、少年の将来を熱心に考える、あるいは考えすぎる「いい人たち」であったのだと思う。ホールデン君は「でもさ、なにも悪いやつだけが人を落ち込ませるってもでもないんだな。いいやつにだって、そういうことがじゅうぶんできるわけだよ」と語っている。良かれと思つてやったことが、相手に致命的な重荷を背負わせることがあり得る、

というのがこの世の難しさだ。少年たちが「良い子」であろうとして自らの荷を重くしてしまうということも珍しいことではない。

ホールデン君に救いがあるのは、自分自身の「問題点」を明確に意識しているところだと思ふ。「家族の中でただ一人出来が悪いんだ」とも語っている。

「良い子」であることは早くから諦めている。その上で、彼は「本だけとはかくたくさん読む」という生き方をしていることが分かる。十六歳の少年の体験することには限りがある。彼は、本を読むことで人生は様々な表情を見せてくれるものだということを学んでいたに違いない。

少年には、本を読む余裕はあまりなかったのではないだろうか。本を読むぐらいの時間があつたら勉強しろと言われていたかもしれない。少年がいろんな本を読んで、せめてまず家出をしてから考えてくれたら、と類似の事件続発の中で改めて思う。

マネキン

佐川 毅彦



朝六時頃、健康のため散歩にゆく。あるマンションのゴミ集積場に半透明の大きなビニール袋が三つ置いてあった。

なんだ、これは、びっくりした。口が開いていて、髪の毛がクログロと外にとびだしあふれている。

ビニールを透かして顔もみえる。たくさんの人間の首がつめこまれている。まさか、そんな馬鹿な。

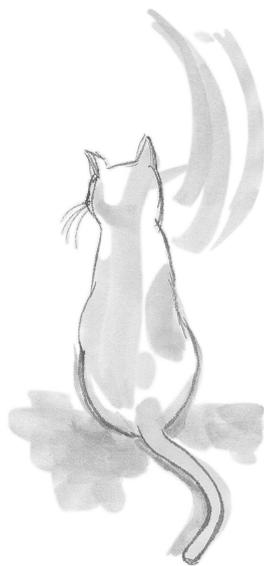
よく見るとマネキンだった。ホッとしたが、とても気味が悪い誰が捨てたんだ。

人騒がせなと思いつつその場をはなれ、歩きつづける。

一時間近く歩いて自宅へ引き返す。先ほどのマネキンの事はすっかり忘れていた。

ゴミ集積場を通った時、また、びっくりしてしまった。やはりなんとなく怖い。

猫が階段で寝ている



片岡義男
(作家)

いつも乗り降りしている私鉄の駅から現在の僕の自宅まで、やや急ぎ足で歩いて三分ほどだ。その三分間の道のりの大部分は、階段によって占められている。段数は百二十段ほどある。僕の自宅があるあたりは高台になっていて、その下の駅や周辺とのあいだには、かなりの高低差がある。駅へ向かうときはこの階段を降りる。電車を降りて、駅を出て自宅へと帰るときには、この

階段を上がっていく。ときたま、駆け上がることもある。

現在の自宅へ引越してから七年が経過し、いまは八年目に入っている。階段を使うようになったのは、いまのところへ引越して以来だ。それまでは、おなじ駅から歩いて七、八分のところに、二十年ほど住んだ。その自宅

へいくには、おなじ高台をまず上がるのだが、階段から東へ五十メートルと

離れていないところに坂道があり、そちらを利用していた。途中までは階段で、あとは気持ち良く急傾斜の坂道だ。

この坂道のほうを登ったり下ったりしていた頃にはまったく見かけなかった一匹の雌猫を、西側の階段を使うようになった初日に、僕は見た。階段で寝ていた。引越した次の日から僕はなにかと忙しく、階段を少なくとも三度は、登り降りした。そのつど、お

なじ場所に、あるいは少しだけ離れた場所、猫は寝ていた。この階段を日常的に使う人なら護でも知っている猫だ。階段猫、と呼んでいる人たちもいる。

愛想をふりまくタイプの猫ではないけれど、だいたいにおいて可愛がられている。階段に面して建っている軒下の家のひとつが、外で飼っている猫だと僕は思っていたが、どこの飼い猫でもなく、近くに住む主婦が食事や水の世話をしているという。食事の時間に彼女の家へいくと、そこにはキャットフードと水が用意されている、ということのようにだ。僕の家食堂から見下ろす道を、この猫が夜中に歩いているのを、ふと窓越しに見ることもある。

階段のどこかで寝ているか、そのあたりを歩いているか、あるいはどこにも姿が見えないか、その三とおりの生活習慣を、この猫は守っているようだ。寝る場所は階段のあちこちだが、ここあるいはあそこ、さもなくばあのあたり、というふうに、いくつかのきま

た場所がある。階段のまんなかの人が歩くところに、長々と体を横たえてひっくり返っていることもある。夏に向けて暑くなっていく季節に、こうしていることが多い。その季節には、階段のそのあたりを、風が吹き降ろすのではないかと僕は思っている。

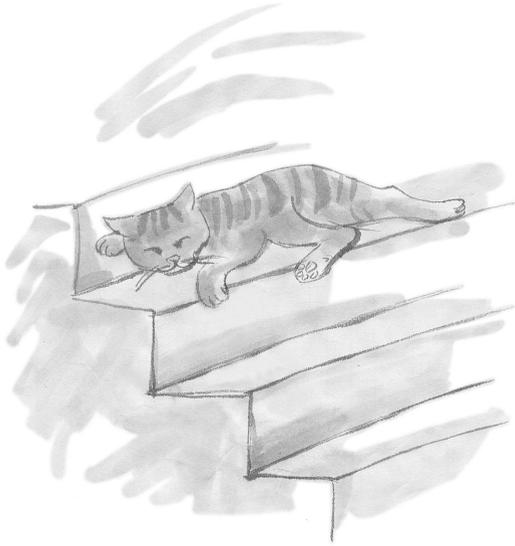
階段の端に前足を揃えてすわっていると、僕は立ちどまって頭を撫でてみたりする。立ち上がって僕の脚のあいだを、体をすりつけながら、何度も出たり入ったりすることもあるが、なんら反応を示さないこともある。猫にも気持ちの乗らないときはあるのだろう。

三年ほど前、ある日の夜、この猫が階段から自宅まで、僕を先導して送ってくれたことがあった。まださほど遅くない時間、駅を出て道を渡り、階段を途中の踊り場まで上がっていくと、そこにいつもの猫がすわっていた。立ち上がって僕を見上げ、「ニヤーン」と優しく言うのと、僕の先にたつて階段を上がっていった。三、四メートルあとから、僕も階段を上がった。

階段を上がりきると右へいく。先を歩く猫は右へ向かい、途中で斜めに道を渡った。僕の自宅は道の向こう側にあり、僕はいつもそのあたりで斜めに道を渡っている。そこから十メートルほどで、僕の家ガレージが道に面している。このガレージの前から、高いところにある敷地に向けて、階段がある。道からガレージの前へ入り、そこを横切り、猫は階段を上がっていった。はつきりした目的のもとに、明確な意思にもとづいて、猫は歩いていた。うしろから見えていた僕には、そのことがよくわかった。

階段を上がるとそこには門がある。門の前で前足を揃えてすわった猫は、階段を上がってくる僕を見上げ、「ニヤーン」と言った。この猫は僕という人を識別することが出来るのだ。しかもその僕の自宅がどこであるかも、正確に知っている。そしてそれだけではなく、なんらかの理由によって、その夜だけは、僕を自宅まで先導して送ってくれたのだ。

僕は門を入り、玄関に向けてさらに階段を上がった。そしてドアの前で立ちどまり、猫に顔を向けた。猫は「ニャーン」と言った。「おやすみ」と僕は応え、ドアを開いて家のなかに入った。駅への階段を歩けば、往きか帰りにはほほかならずこの猫と会うのだが、僕を自宅まで送ってくれたのは、これまでの八年間、このときただ一度だけだ。梅雨が明けて日中の気温が三十五度の今日、僕は階段を歩いた。往きにも帰りにも、猫は階段の好みの場所にひっくり返り、ただひたすら暑さに耐えているように見えた。



「キエフ美術館での展覧会に寄せて」



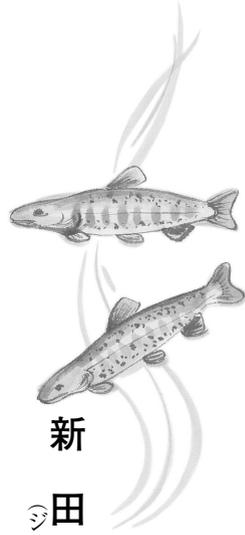
さかもと ふさ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)

今年十月ウクライナの日本文化月間で、キエフの美術館で展覧会をすることになった。五月十五日から十八日まで、ウイーン滞在中に、キエフに下見に行った。ウイーンから飛行機で二時間、時差が一時間。当日は激しい雨の中、マロニエ並木を車でひた走り、小一時間も走りドニエプル川を渡る頃、先ほどの雨もやみ街が見えてきた、重厚な石造りのビルが林立し、街の中も木々は多くマロニエの花が万開であった。宿泊はソビエト時代からある独立広場に面したウクライナホテル。部屋からの眺めは緑に囲まれた中にソフィア寺院、ミハエル寺があり、すばらしい色を望むことができる。立地条件はいいが、ホテル内は暗くソ連時代の面影が色濃く残っている。

翌日展覧会をするボクダン、ハネンコ美術館に出かけた。元貴族が建てた個人美術館だ、国宝級の所蔵品も多く、その一階の一室で展覧会が行われる。キエフは京都と姉妹都市、今から楽しみである。

溪流釣り——夢幻のはざまで……



新田啓造
(ジャーナリスト)

車のバックに新品の釣り竿が入ったまま二、三年過ぎようとしている。数十年ぶりに、溪流釣りをしてみようかと気紛れに買ったものだ。

岩魚、山魚女を狙って溪流に踏み入ったのは四十年前である。山登りに限界を感じはじめた頃、これならまだできるかもしれないというより、幻の巨大魚を釣つてやろうという野心も多少あった。下地は北アルプスを庭のように駆けめぐっていたので、黒部(川)の源流で岩魚を数十匹釣り上げた実績もあった。

「日本の岩魚のメッカを制覇しよう」と決め、まず出掛けたのは大井川の源流だった。大井川鉄道(トロッコ電車)を使つて入った。

木賊(読みにくい地名)を過ぎてから枝沢に入り竿を出した。昼間でも薄暗い谷が連続している。いきなり尺を越えるアマゴがきた。専門の釣り師はこんな山中には、わけ入ってこない。まったく、すれていないのだ。

一カ所、登山道が崩落しているところがあった。そこを越えなければ先には行けない。台風の惨害だった。下は

数百メートル切れて、遙か下方に大井川の本流が光っていた。

走り幅跳びの要領で飛び越える以外に方法はない。源流を目指す身には辛い選択だった。なんとか越えたものの冷汗ものだった。が、その後に至福のときが待っていた。

源流が近づくにつれ、大物が何本か釣れた。週刊誌の上に乗せると頭と尻っぽが飛び出す四、五十cm級を釣り上げるのができた。

一週間、この山中にいて最後は転付峠を越え身延へ抜けた。

これに味をしめ、翌年は朝日連峰へ向つた。山形駅に着いたのは夕方だった。いずれにしろ駅前で一泊するつもりだったが、街の映画館の深夜映画で「嵐が丘」(エミリー・ブロンテ原作)を朝まで観てしまった。

古寺鉱泉より朝日岳に登り、縦走して大鳥池に降りる。すでに東京を出てから四日が過ぎている。池というより大きな湖である。はやる気持を押さええて竿を出す。狙いは大物。大きめの毛

バリをつけて投げる。

いきなりだった。跳ね上がった魚が擬似バリをくわえて水中に引きずり込む。竿が大きくしなる。用意した道具は大物狙いの秋田の渋糸。引っこぬいても切れる心配はない。形は、ちょうど一尺。湖に定住した岩魚である。

更に、はやる気持ちをぐっと押さえて二投目。ビチャ、水音と共にまた竿がしなる。三投、四投、入れればすぐである。形もそろっている。

どうやら大鳥池では岩魚の共喰いがはじまっているような状態であった。五十匹ほど釣って湖畔の無人小屋のいりりて串に差し塩焼き。七人パーティーの登山者が、「お世話になります」と同宿。岩魚をふるまう。

翌朝、「おいくらでしようか？」と聞かれたのには驚いた。鶴岡に降りて駅前前の銭湯に立ちより東京に戻った。ダンボール一杯、岩魚を背負って。

そして、また次の年、今度は銀山湖を船でわたり、奥只見にわけ入った。銀山平で黄色い野苺を帽子一杯つみ、

溪流で冷やして食べた。野ねずみに食糧を狙われるので、木と木にザイルを張って食糧を吊した。

テントから竿を出すと、同じポイントで何匹でも釣れた。鱒と岩魚が入り混っていた。最後は尾瀬ガ原を抜けて帰った。

一週間を越える釣行は年一度だったが、週末を利用してよく出かけた。井伏鱒二の「釣と釣り師」に登場する山梨県の桂川も、何度か出かけた。エッセイに書かれたままのコースを釣り上がった。新しくできた防砂堤の位置を確認しながら。

その翌年は、三陸海岸沿いの川に入った。溪流ではないが、何故か岩魚が棲んでいた。岩手では、雫石から入った八幡平周辺も忘れられない。このときは溪流釣り初めてという友だちがいて彼に釣らせるのに苦労した。

とどめは下北半島だった。岩魚がいると聞くと、どこでも行きたかった。行きたくて行けなかったのは三面川である。新潟と山形の県境に位置する三

面ダムの上流は行ってみたかった。古希に近い今では無理な希みである。

ここ数年、奥多摩によく出かけている。溪流には魚影は濃い。仲間や知り合いが、何度か釣りに挑戦しているが未だ大物を上げた者はいない。実は、そのことにニンマリしている。

擬似バリを投げると、跳ね上がったくる魚影が脳をかすめる。アタリを合せてからは、ゆっくり竿を立てる。走り回る魚の感触が手に伝わる。

「よしよし、さあ大人しくなりな。もうすぐ釣り上げてやるから」

浅瀬に寄った魚が、最後の力をふりしぼって淵に逃げるが力はない。美しい斑点を煌めかせてタモ（取込み網）の中へ。

これは、現実なのか夢幻の世界なのか判らない。世迷い言をつぶやく齡には充分なっている。竿を出して釣れなかったら、いや、そんなはずがない。

昔つった杵柄きねづかだけが頼りだ。車の中でひっそりと眠る新品の竿は出番を待っているのだろうか。

甲斐国右左口村



永岡 慶之助 (作家)

り、数十年昔の出来事でも、克明に活写、再現してみせ、私らを唸らせたものだった。

彼の筆になる一連の山本周五郎モノは、その精緻な考証に加えるに、作家の身近にあった者独特の強みか、作家の体臭をまで感ぜさせることに成功し、単なる作品批評とは一味異なる世界を浮き出しているのである。今、この小文を書きながら、ふいに私の脳裏をよぎったのは、湯にひたりながら、彼が問わず語りに物語った青春の想い出であった。

太宰治の作品に魅せられ、吹雪の中を歩き汽車を乗り継いで作家を訪ねたそう。その若かりし文学青年が、やがて東京に出て、山本周五郎研究の第一人者と称されるに至ったのだ。周五郎流に言うならば、恐らく「くにのり、よう頑張った」というところであろう。

評論家「クニさん」の口から、山本周五郎と同郷の歌人として山崎方代なる人物の名が語られ、冒頭にのべた「右左口村」という特異な地名が出たのも、

まず特異な読みと言ってよい。右左口と書いて「うばぐち」と読むのである。山梨県甲府盆地の南部、東八代郡の西部に位置する村（現中道町）の名だが、私が最初にこの特異な村名を耳にしたのは、文芸評論家の故・木村久邇典さんからであった。

生前、年に二、三回は、仲間と連れだって伊豆の修善寺や箱根、時には甲

賀の奥深い鉢泉宿まで足をのばしたが、やはり修善寺が一番多くて、かつて山本周五郎が名作『樅ノ木は残った』を執筆した水口旅館を定宿にした。

一風呂浴び、酒が入って舌滑らかとなったクニさんの語る、名作誕生のエピソードの数々は絶品であった。それにして、「評論家木村久邇典」なる人物は、驚嘆すべき記憶力の持ち主であ

そうした温泉のくつろぎからであったようだ。

ところで、「クニさん」が、私の脳裏に刻みつけた歌人「山崎方代」なる人物だが、湯川晃敏氏撮影になる写真集「方代さん」の紹介を貸用させて戴くと、次のようになる。

「一九一四年十一月山梨県東八代郡右左口村（現中道町）生まれ、兄弟たちが生まれては死んでいくので「生き放題死放題、勝手にせよ」と、父が次男に方代と命名。母の死にともない三八年に父と離郷、横浜に住む。四一年に召集され戦地で右目失明、左目は視力〇〇一となり終戦にて帰還……若年より作り続けた短歌が六七年ごろより注目され始め、七五年に『短歌』愛読者賞受賞。七五年より後援者の好意により鎌倉市手広に住み、方代艸庵と称した。生涯定職につかず妻子も定住家も持たず酒を愛した人生は、口語を交えた独自の短歌作品とともに人柄も愛され、多くのファンに支えられながら八五年八月逝去」

私は、直接お目にかかる機会を逸したが、偶々、私達仲間の共通の知人で、前記方代さんの佳き理解者であり、方代艸庵の提供者でもある鎌倉市手広の根岸悦雄さんから、その後、歌集「迦葉」「方代」「山崎方代追悼・研究」、写真集「方代さん」などの諸書を頂戴したところには、私もファンの一人になりおわせていたようだ。

なお方代さんの幸せは、根岸悦雄さんと同様、佳き理解者に瑞泉寺住職父子があったことであろう。彼が、

瑞泉寺の和尚がたてし一ぶくを

両手に受けていただきにけり

と先代住職を詠う心はおだやかだが、かつての帰還兵山崎方代二等兵には、

弾片の無数に入れる身体とて

四時間あまり家を捜せしと

いささかの視力残れる幸を

われ繰返す聞きあきたらむか

という、戦傷によって人生の軌道を、心ならずもズレてしまった苛立つ思いがあったのだ。その彼が「和尚がたてし一ぶく」を心穏やかに味わう姿を想

うと、ほっとするのを覚えずにはいられない。なお子息の現任職大下一真さんは歌人であり、実は写真集「方代さん」を創る会も、瑞泉寺にあるのである。

心身に生涯決して癒されることのない、深い戦傷を負った方代さんは、それでも心温かな支持者の中で、しだいに飄々たる境地へといたっていく。その随筆集「青じその花」に、「もう取り返しつかない大方の日を旅の空で見送ってしまった」と述べた役も、

右左口の峠の道のうまごやし

道を埋めて咲いておるらん

ふるさとの右左口郷は骨董の

底にゆられてわが帰る村

遙かに生地へ思いを馳せて詠じているのである。地誌によれば、右左口峠越は、甲洲と駿河を結ぶ最短距離の交易路として、古来重要視されたところ。以上、伊豆修善寺の湯煙の中で、クニさんと交わした会話のつづきを、書いた。

睡眠時間



北上

(作家) 次郎

ただいま明け方の四時半である。本当は七時に起きる予定で二時半に横になつたら、二時間で目が覚めてしまった。することもないので、こうしてこの原稿を書いている。

日頃は眠つてばかりいる。通常の睡眠時間は十時間から十二時間である。八時間くらいの睡眠で起きてしまうと、必ずあとで眠くなり、三〜四時間の仮眠を取ることになる。

私は月曜から金曜まで仕事場に寝泊まりしているのだが、たった一人の仕

事場で、誰も尋ねてこないから、昼寝するのに最適なのだ。電話も鳴らない。

これが家にいようものなら、牛乳屋に宅配便に回覧板と、いろいろやってきて、そのたびにピンポンピンポンとうるさく寝ている暇がないけれど、この仕事場はビルの四階にあり、そういう客は一階にある雑誌社でストップするから四階まであがってこない。電話も一階でストップし、緊急のもの以外は鳴らない仕組みになっている。部屋には直通電話もあるが、これは知り合

いにしてか教えていないので、そう滅多にはならない。近頃はメールが普及しているもので、仕事や用件のほとんどはメールで来るから、電話が鳴ることはほとんどない。

一階にある雑誌社の顧問をしている関係で、そういう仕組みになっていて、つまりは眠くなつたらソファでごろんと横になると、あとは邪魔するものがないのである。ビルは住宅街の一郭にあるから、まわりも静か。だから、仮眠の毎日だ。

私の睡眠時間は、四歳児の睡眠時間に近いんだそうだ。この秋に還暦を迎える身が、四歳時と同じでは困つてしまうが、いつだったかテレビで見た知識で言うと、体にはよくないらしい。寝過ぎるのはよくないと医者さんが言っていた。しかし体にはよくないとわかっているにもかかわらず、煙草をやめられないのと同じように、睡眠時間も変えられない。眠いんだもの、仕方がない。

ところが週末が近づくと、途端に寝起きがよくなる。いつもは十〜十二時